

小特集「論理型言語とその処理系」の編集にあたって

川 戸 信 明†

論文誌編集委員会は、論文誌を質・量ともに一層充実させ、より魅力あるものとすべく、新しい試みに積極的に挑戦していこうと考えております。議論の煮つまったものについては、順次実行に移しており、既に昭和 61 年 1 月より論文誌の月刊化を達成しております。また従来から要望の多かったカラー写真の掲載を可能にするなど、新しいイメージを打ち出しつつあります。

特集号を設けることも、この一環として、61 年 7 月に提案されました。何分、初めての試みであり、予測を立て難い中、できるだけ速やかに特集号を実現したいということで、具体的な実行案を議論しました。この結果、既に投稿された査読中の論文のうち件数の多いものが、現在活発に研究が行われ、広く興味を持たれている研究テーマであると考えられ、また早期実現の可能性も高いことから、この方向で第 1 回目の特集のテーマを決定することになりました。

「論理型言語とその処理系」というテーマは、上述の方針に沿って、61 年 10 月に提案したものです。当初は、62 年 3 月号を目標に、候補論文 10 件（その後 1 件追加し計 11 件）について、査読・照会の迅速化を図りましたが、3 月号とするための期限である 1 月時点では、採録 4 件と十分な件数に達せず、2 月に判断を延期しました。しかし、この時点でも採録 5 件であり、査読状況から今後件数の大幅な増加は期待できないことが判明したため、本テーマの採録論文を小特集として、一般論文とともに、4 月号に掲載することとしました。このような曲折を経て、今皆様が手に取っておられる論文誌ができあがりました。

Prolog に代表される論理型言語は、第五世代コンピュータプロジェクトとの関連も深く、ここ数年、非常に話題になっており、人工知能的要素を必要とする応用に使用されてきています。しかし、この言語お

よび処理系には依然解決すべき課題や改良すべき点が多々あり、活発な研究・開発が行われていることが投稿論文から推察することができるため、本テーマの提案を行ったわけです。

もちろん、論理型言語とその処理系に関する最新の研究成果を網羅することは、投稿論文のみを対象としたため困難であり、並列処理等重要な課題を扱った論文は掲載できませんでした。しかし、この分野の研究動向をある程度窺えるだけの幅広くバラエティに富んだ論文を集めることはできたのではないかと考えます。

なお、昭和 59 年 12 月の学会誌 (Vol. 25, No. 12) において、「プログラミング言語 Prolog」というテーマで特集が組まれており、当時の我が国における論理型言語の研究・開発・応用の水準が解説されています。これを参考にあるいはこれと比較しながら、本特集の論文を読まれるのもよいのではないかと考えます。

本小特集を発行できたことは、小さな一歩ではありますが、魅力ある論文誌実現へ向けての重要な前進であると考えています。現在、既に「画像処理エキスパートシステム」というテーマで、一般募集を行う本格的な特集号の計画が進んでおり、今回の小特集が文字どおり特集号を“小さく産んで大きく育てる”ことになることを願っています。

本論文誌の購読者数は、残念ながら、会員数に対する比率から見て、十分とは言えない状況にあります。今回あるいは今後の特集号が購読者増加の一つの契機となり、学会の発展に少しでも貢献できれば、誠に幸いです。

本小特集の編集にあたっては、多数の査読者および著者の方に、多忙の中、積極的な協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

(昭和 62 年 2 月 24 日)

† (株)富士通研究所